

ともの家 だより

< いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する >

今年も残るところあとわずかとなりました。
各事業所にどんな年だったか振り返ってもらいました。

アンジェールともの家 一年を振り返る

菅原 佐代子

4 月からの新しい年度になってすぐの 19 日に、アンジェールともの家の開設と共にずっと過ごしてこられた I さんが旅立ちました。10 数年を越えての、ともの家の暮らしでたくさん思い出を置いて行ってくれました。「ずっとけて 暮らすと心 丸くなる」「苦をなめた 人で笑顔を 絶やさない」という川柳が I さんの居室の壁に貼ってあり、見るたびに、I さんが寝たきりになる前の上品な笑顔が思い出され、ついつい小さなことで悩みがちな私はエールの言葉として励ましてもらっていました。

アンジェールともの家の職員の方も、4 月から、課長、主任、共に 40 代の男性職員になり、若返り？で、新しいアイデアを提案してくれています。今年度の実践研究はユマニチュードですが、時には失敗しつつ、入居者、職員ともに大切にしよう関係をつくりあげていきたいと思っています。

アンジェールともの家の 2 階には、前理事長の笑顔の写真が飾られています。ずっとけながらも悲喜こもごもに暮らす 90 代から 20 代の私たちを見守

ってくれているようです。理事長、応援しててくださいね！

この道 一年を振り返って

花崎 秀美

平成 30 年全員健康で正月を迎えることが出来ました。喜びもつかの間、中旬から重松マサヨさん（92）が体調を崩し 3 月 31 日逝去されました。湯の山ともの家の時代から色々と思い出を作って下さった方でした。最後をむかえる数日間、毎日家族さんも来訪され静かに旅立たれました。元気そうに見えても少しの事でバラバラと壊れてしまう…前理事長の「年寄りにはガラス細工」という言葉がまた頭に浮かびました。4 月 1 日吾も紅から正岡サダ子さん入居、すぐにこの道での生活にも慣れ、個性豊かにクスリと笑わせて下さいます。

2 年ほど前から入居されている A さんの毎日の大声、他者との口論等に頭を悩ませていたのですが、縫物をしていると落ち着いていることに気づき、その後、新聞折り、ウエス切りと手先を使う事をしてもらい、塗り絵に一番興味を示し喜んでされるのが分かり、6 月頃から娘さんに色鉛筆を購入してもらい文化祭の作品として出せる程の枚数にいたりしました。ご自分から「アレ取って」と進んでされることも多いのですが、そこは人間。イライラしているときなどは自然に黒や暗めの色を手取るようです。少しでも褒めると「あーうれしい」と照れくさそうにしています。何もしてないと常に動いて大声を出していた頃と比べ今では他者の言葉にも少し我慢されることも多くなっているようです。A さんにとってのやりがいを見つけられたように他の人にも何か見つけることが出来るとよいと思います。

溝辺ともの家 H30 年の振り返り

古川 晃

H30 年の幕開けは利用者さん 5 名でのスタートでした。年末から入院

している方がおられ年始から幸先悪く、「今年は何かが起こるのか」と不安に駆られていました。しかし、振り返ってみれば、みなさん風邪すら引かず、お元気に一年を過ごすことができました。

年々、重度化していく中でも、その日その日を楽しく過ごして頂きたいと言う思いもあり、今年は室内レクを充実させようと取り組みました。日によっては、満足にできない事もあります。各職員が考え、実践できていたように思います。漠然と「室内レクの充実」と言っても、ただレクを考え実践するだけではなく、その日の職員間での連携・協力が必要不可欠であることを痛感した一年でした。利用者さんに日々教わりながら笑顔の見られる生活を支えて行きたいと思います。

2018年のできごと

小規模多機能ホームともの家 二宮 美和子

西暦 2018 年が終わろうとしている。というか、あと 5 ヶ月足らずで「平成」の時代が幕を下ろすのだ。今関わっている高齢者は、「大正、昭和、平成、〇〇」と 4 元号を生き抜くこととなる。すごいとしか言いようがない。悲惨だった戦争時代を生き抜き、今もその時の体験を語り継いでいる。つい先日、95 歳を目前に一人の女性が亡くなった。彼女は引き上げ船で中国から帰国した難儀話を、涙しながらよく話してくれた。何事にも強気で取り組んできた彼女だったが、がんには勝てなかった。最期は、息子の横で静かに息を引き取った。悲しいできごとではあったが、痛みから永遠に解放されたことは、彼女にとって幸せであったと思いたい。

最近、故永和良之助前理事長の著書を紐解きながら話し合う機会を得ることができた。そこには、以前読んだ時と同じ「スーパーヒーロー」の姿があった。人と向き合い、人に寄り添う姿勢は、時代が変わっても同じであると思っている、今一度、立ち止まり、「人を理解する」「人を受け止める」ことについて振り返り考えていきたい。

来年は、私の好きな『猪突猛進』の年である。以前のように突っ走ることを目指すのではなく、一つの区切りの年としていきたいと思う。

ともの家 吾も紅での1年を振り返って

宇都宮 拓人

昨年10月にともの家に就職してから約1年が過ぎました。月並みではありますが、長いようであっという間の1年でした。

1年働いて一番感じたのは、介護というものの難しさ、そして奥深さです。利用者さん一人ひとりに、これまで生きてきた人生経験、それにより培われた考え方や人格があります。多種多様な利用者さん、それぞれの方に応じた介護を提供するということは、よくよく考えてみるととても難しいことだと改めて思います。同時に、介護の面白いところでもあると感じます。100点の完璧な介護というのは不可能かもしれませんが、できる限りの介護を提供するために、知識や技術はもちろんのこと、一人ひとりの利用者さんに心から向き合おうという熱意・誠意・尊敬を持って日々努めていきたいです。

数ある介護施設の中から初めての就職先としてともの家を選んだ経緯ですが、同じ初任者研修を受けていた受講生の一人がともの家で勤めており、うちに来ないかと誘ってくれたことでした。初めての介護職、どこがいいかも分からないし、知り合いがいる方が働きやすいかと正直軽い気持ちで面接を受け、そのまま採用されました。しかし次第にともの家の理念や歴史を知り、「ここで働けてよかった」と心から思うようになりました。ここまで利用者さん、またその家族さんに対して親身に寄り添う姿勢をもって運営している施設は他にどれだけあるだろうか、と思います。そんなともの家の一員として、誇りと責任、そして感謝の気持ちを持ってこれからも精進していきます。



職員リレーエッセー 職員のこぼ

※前回の北川正さんから続いては奥さん佳子さんに一言お願いしました。

松山と京都どちらが住みやすい？！

アンジュールともの家 北川 佳子

昨年4月に夫婦2人で「ともの家」に勤務いたしました。

日々の仕事に慣れることに精一杯で、休日はというと“疲れてお昼寝”という毎日を過ごしておりました。松山の地理が分からず買い物はもっぱら自宅近くの商店で済ませていました。



2ヶ月が過ぎた頃、ようやく少し余裕が出て夫婦で色々な所に外出し始めました。外出し始めて感じたのは、京都と違い公共交通機関が不便で料金が高いということです。主人が大型バイクに乗り始めてから車は手放しましたのでバス等が不便だと買物ひとつも困ってしまいます。「松山は車がないと不便だよ」という同僚の言葉も領けました。そこで早速自転車2台（笑）を購入し外出の足を確保いたしました。（*主人は大型バイクでも外出し、ツーリング仲間も出来たそうですが・・・！）

夫婦揃って京都生まれの京都市民ですので「京都では～」「京都だったら～」ということは多数ありますが、人生60歳になって今までと全く違う環境で生活できる機会は貴重な経験だと思い「松山に来たから・居るから出来ること」を毎日探しています。温泉に銭湯のように入れる・食べたことのない食材・見たことのない景色など etc. 今まで大好きで買って食べていた干し柿も、去年は渋柿を購入して自分で作りました。

住めば都といいますが、松山は京都より「車の運転マナーが歩行者に優しい」「バスの運転手さんが親切」「野菜が新鮮で安い」「城山公園から見上げる松山城の景色が好き」etc. など、住みやすい点も感じています。

京都には家族や友人がおり大切な故郷であることに変わりありませんが、松山もまた第二の故郷になってきたように思います。

「いつも同じ」

日々人と接するときに、私なりに心掛けていることがあります。それは“いつも同じ”ように明るく穏やかな自分でいようということです。とはいうものの、決して簡単なことではありません。未熟者ですから、身体が不調な時、不機嫌な時、落ち込んでいる時など表情が曇り言葉が荒くなってしまいます。保育士として働いていた経験もあり、自分の態度や表情が子どもたちに与える影響の大きさは痛感していましたので“いつも同じ”を心掛けようと思っているのですが、言葉で言うほど簡単なことではありません。

以前勤務していた職場に私が尊敬する方がおられます。その方はいつお会いしても穏やかで“いつも同じ”ように人に接しておられます。大学機構の責任者であり、多忙を極めておられましたが、不機嫌な様子を見せたり相手に気を遣わせたりされず“いつも同じ”なのです。

対人援助は、こちらの様子を相手が敏感に察してしまうということを忘れず、お年寄りと接する時、自分の態度や表情でこちらが意図しないメッセージを与えることのないように“いつも同じ”笑顔でいようと思います。まだまだ、まだまだ修行が足りませんが…。



介護ひまなし日記⑮

北欧研修旅行記 = その 2

永和 里佳子

さて、夜行フェリーを降り早朝のタクシーと電車を乗り継いでなんとか福岡空港にたどり着いた松山組の面々。ここで京都から参加する宇治明星園の野村さんと、九州なごみ園の杉永さんに合流。ようやく全員がそろった。自己紹介を交わし、さっそくゲートへ向かう。しかし杉永さんの装いを見て「？」

疑念が起こった。背中にリュック、そこから折りたたみ傘の柄が覗いている。さらに手提げ袋。腰にウェストポーチという重装備。「飛行機の中で傘はいらないんじゃないか…」と思ったが言葉を飲み込んだ。搭乗口を抜けてフィンエアーに乗り込む。「みんな乗れたかな？」確認した理事長、杉永さんの隣の席を見て息を呑んだ。屈強な体格の黒人の若い男性が座っている。「トイレに立つときなど、どいてもらわなきゃいけないのに大丈夫だろうか…」理事長の胸に一抹の不安が影を落とした。

9時間のフライトの間に2回も機内食が出た。私は「ビア・プリーズ？」とだめもとで頼んだら無料でもらえると知り、料理が出てくるたびにアルコールを頼み、くっちゃねを繰り返していたら最後は気分が悪くなりワインを他の人にあげてしまった。6歳の娘は「宇宙人襲撃」という映画をけらけら笑いながら見て、帰りは日本語吹き替え版を見よう、と楽しみに、また5列ほど前にアンジュールの管理者・渡邊さんの姿を見つけるとあろうことか「研ちゃん」と友達のように呼んで遊びに行くなど、意外と落ち着いて機内の旅を満喫したようだ。(うちは母子家庭のため旅行中面倒を見てくれる人がおらず、やむなく兄は事務長宅にホームステイさせてもらい、6歳の妹を連れて行くことにした。これにより平均年齢が大幅に下がった。)

やっと飛行機はヘルシンキに着いた。8時間の時差があるので19時のはずなのにまだ昼だった。「北欧に来た」というだけで一同テンションが高くなっており、「バリアフリーだ！」とトイレをパシャパシャと撮影していた。そこから今度はスウェーデン行きの飛行機に乗り換える。理事長は杉永さんに大丈夫だったか尋ねてみた。「それが、日本語ぺらぺらの黒人さんだったんです！トイレに行きたくて“ちょっとすみません”って日本語で言ったら“はい、なんですか”って流暢な日本語が返ってきて。打ち解けて話ができまし全然気を使わなくてよかったです～」杉永さん、なかなか肝の据わった方だなあ、と感心した。

しかし杉永さん、傘は持ち込んだのにお金はトランクに入れて預けており、「金属だからブザーが鳴るかと思って」とのこと。普通、逆では…。面白い旅の予感がしていた。(まだ一步もスウェーデンの土地を踏まないまま、次号に続く)

利用者さんの一句



普段から短歌をたしなまれる篠籐菊美さん（吾も紅）。お願いしたところ、久万高原町の遠足を題材に三句詠んでくださいました。11月13日、ふるさと村の紅葉は丁度見頃で、恒例のかかし祭りが行われており、本物そっくりの力作にみなさん驚嘆されました。普段は猫のように丸くなって寝てばかりの方も背筋を伸ばして歩き回られ、「この赤と緑のコントラストが見事」と言われていました。天気予報は怪しかったのですが、ちょうど昼ご飯を食べようと車に乗り込んだところで雨が降り、運転手は晴れ男なのかはたまた雨男なのかで議論が巻き起こりました。そのときの様子を楽しく描かれています。

晴れ男 雨男の運転で
安全第一 紅葉の村へ

ふる里の紅葉とかかしに迎へられ
われも紅車は 一日楽し

子や孫といつか来た村 介護車で
今日はかかしと 紅葉に感謝

「永和良之助」勉強会を始めました！

理事長 永和淑子

9月2日、「永和先生の墓参を」と我が家に出雲ことぶき園の槻谷和夫理事長他2名の方の来訪があった。槻谷さんは、遺影に線香をあげてくださり「実は老人福祉協議会が設立50周年記念に募集した老人福祉文献賞に、入賞した永和先生の論文をもういちど読みたくてさがしている」といわれる。老施協、永和の勤務先であった特養神愛園、国会図書館にも問い合わせたが見つからず「ここにありませんか」。

永和の本棚で見つけ数部コピーしてお送りしたところ、職員さんの感想文を同封した丁寧なお礼状が届いた。「当職員だけでなく心ある事業所にも配布しております」また、「永和氏は今も確実に生き続けておられると思います。私自身も心新たにすることができました」。

その論文は、昭和57年当時札幌の特養神愛園で生活指導員であった永和

良之助（当時 34 歳）の「老人ホームにおけるケアの一考察 ―ワーカーの態度を中心にして―」であり、若き日の槻谷さんに衝撃を与えた一文であったようだ。

1999 年 3 月、「ワーカーズコレクティブとも」として発足したともの家の活動も、来年 3 月で 20 周年を迎えることとなった。スタート時はメンバーの情熱や使命感にささえられて不安を感じることはなかったが、現在先行き不透明な濃霧のなかにいるような不安感におそわれることがある。介護職員の絶対的不足の中、より高い給料のほうへ人はながれていくという。しかし、霧中ではともの家自身が灯りとなり周辺を照らす存在となるしかないであろう。設立当初の事情を知るもの皆無、前理事長を知る職員も数少ない。特養の生活指導員としてスタートした前理事長が、デイケア所長、大学での教職等の仕事を通じて得た労苦が彼の諸著作であり、ともの家がその夢を託されているのだ。

ともの家を継承していく人たちに伝えることが私の責務であると思い、このたび勉強会をひらくこととした。第一回目は 10 月 29 日に、槻谷さんに送った論文「老人ホームにおけるケアの一考察」を読み、11 月からは、永和良之助著「老いと出会い」を読み始めている。平日の午後 4 時過ぎからの開催で、出席できない日もあるだろうが読むだけでも勉強となるので多くの人の参加を願っている。

働く者にとっての学問とは、疲れきった身体を鞭打つところから始まりま
す。特に主婦である寮母さんの場合は、更にその上に家事や育児によって疲
労困憊した身体を自ら鞭打って本の 1 ページを開くところから始まります。
それは賢治の言葉を借りれば、まさに「泣きながらからだに刻んで行く勉強」
です。（老いと出会い 18 頁）

編集後記

2018 年も終わろうとしています。皆様のたくさんのご支援とご協力あ
りがとうございました。新しい年も職員一同頑張っまいます。（里）